

保母としての研究活動

——よき保母となるために——



樋口三紀子

西の空に美しい夕やけが見える頃、保育所の一日が終る。帰って行く子どもの後姿を見送りながら、私は今日一日良い保母であつただろうかといつも考える。

研究活動への動機となるもの

幼児は、より良い環境において保育されることが望ましいことは、今更いうまでもないことであるが、施設保育においてその環境を考えるとき、保母が環境要因として幼児に多大の影響をあたえていることがわかる。

すなわち保育所におけるほとんどの子どもたちは朝七時半から夕方五時半まで、眠っていない時の大部分を保育所で過ごし、母

親よりも保母と接している時の方がはるかに長い。しかも性格形成の重要な時期にある子どもたち三十人の母親代りをひとりの保母がつとめるのである。私は保母としてのその責任の重大さを改めて考えさせられるのである。

私が保母という職業を志したのは十数年前、私が幼稚園でお世話になつた先生の印象が深く心の中に残っていたからである。やさしくて温い感じの先生だった。当時子どもながらに、私もあのような先生になりたいと考えていたものだった。それが、今、保母となつて、私はいったい子どもたちにどういふ目でみられているのだろうか、と時々考えるようになった。それは、私の受けた先生の影響が、私の一生を左右する結果となつたからである。自分自身のこうした体験から考えてみても、私が子どもたちに与え

ている影響はかなり大きいものと考えられる。とくに現在の保育所は、当時の幼稚園とはことなり、保育の幼児に接する時間は著しく長く、そういった問題についてはよほど考えなければならぬということと思う。

二年間の専門教育で保育に関する知識を大急ぎでつめこみ、保育の資格を得た。これで私もはじめて社会の一員として役立つ仕事ができるのだ。しかも長い間の念願かなって、これから保母として子どもたちとの生活がはじまるという大きな喜びと希望をもって現在の保育所に入った。そしてこれまで学び、頭に描いた保育というものを実際にやってみようと試みた。しかしそれらはことごとく失敗だった。私の学んだ保育上の理論それ自身は正しいものだったとしても、それは今すぐ現場に役立つものではなかった。そして、それ以上にその理論を現場に活かす力が私になかったことを強く感じた。ともすれば仕事の繁雑さに追われ自分の態度をゆっくり反省する間もなく、理想と現実との隔りをただむなししく思えばかりであった。保育雑誌や他の具体的な参考資料をみると、いろいろな問題が数多くとり上げられ論議されているが、それらはいずれも私たちのように直接現場の仕事にたずさわるものにとつて、近よりがたい高度のものであった。また一方現場において、ある一つの観念的な問題が学問的裏づけなしに動かす

ことのできない指導要領となっていたりする場合もあり、経験の豊富な先輩諸先生ならいざしらず、私のようにまだ経験の浅い保母が、このような資料をそのまま利用することは危険この上ない話である。私たち若輩はいったい何を基にして保育をおこなえばよいのか。私自身のためにも、子どもたちのためにも私は一日も早く良い保母にならなければならない。良い保母になるためには、自分自身で何かを見い出さねばならない。私が研究に興味をもちはじめたのもこういったことがもとになっている。

研究活動への動機はそれぞれ人によって異なるであろうが、やはり保母としての研究は良い保母となるためには、といった考えからはじまらねばならないと思う。

一日の研究活動

私の保育所は朝七時半その仕事のはじまる。朝の冷い空気に身のひきしまるような気持で保育所に急ぐ。どこもかも朝の光を浴びてまぶしいばかり。七時四十分、一番早い子どもが登園する。まだ眠むそうにボンヤリした顔で母親に別れを告げる。「お早よう、トンチャン」と声をかけると、急にニコッと笑って走り出す。今日もまた保母として忙しい一日が始まる。と同時に、ささ

やかながら私の研究活動が開始される時でもある。

私の今とやかかっている問題は幼児集団の動態についてであるが、私の研究は特別な研究時間を必要としない。それは日常における保育の仕事と平行しておこなわれるもので、研究のための時間的苦しみを味わうようなこともなく、また幼児に特別な行動や集団を要求することもない。子どもたちがブランコやスベリダイなどの遊具玩具で遊ぶ場合、保育の当然の役目として彼らがけがをしないようにそれとなく見守っていなければならぬ。その時私にはただ単なるお守り役としての仕事以外に幼児の自然な動きを観察し、メモしていくという仕事が課せられる。ブランコの奪い合いがはじまると、仲裁の必要があるかどうか様子を見ながらもその時々々の幼児の動きを丹念に観察し、メモする。あくまでも幼児の自然の動きをとらえるためである。したがって、一斉保育や保育が子どもの中に混って一しょに遊んでいるような時の観察はおこなわない。幼児がおとなの要因の入らない彼らだけの世界で、自由に行動しているような時が、私の観察時間である。このようにして、私は幼児とはどういふものかをよりよく理解するために毎日観察をつづけていった。観察をつづける場合最も重要でしかも根気を要することは、観察事実をできうるかぎりメモするということである。幼児の実態を科学的に把握するためには、観

察結果を数的表現によって整理統合し、一つの法則を見い出さねばならない。すなわち観察するだけでなく、観察結果をメモしなければならぬ。メモする暇がなくてせっかく観察した結果を無駄にしてしまったこともしばしばある。繁雑極まる仕事の間の観察であるから、その時々にもメモしておかなければすぐに忘れてしまう。私はいつもポケットの中に小さな紙切れを用意しており、それに観察した幼児の行動を数的表現を中心にしてメモしていくのである。一日の収穫はほんの少しでも、それを毎日くりかえしていれば何か幼児の実態を表わすものが出てくるはずである。

私は観察メモが少し集まると、夜帰宅してから整理してみる。集めた数字をバラバラにしてみたり、まとめてみたり、いろいろな面からいじってみる。毎日の観察結果をあれてもない、これでもないと考えながら、何らかのものを見い出すまでの過程が私にとって一つの楽しみでもある。

しかし、その楽しみも時に苦痛にかわることもある。どのよう整理してみても何もみつからない時、また一つの問題を何時間考えてもわからなかったり、つまずきつまずきの連続で終りには投げだしてしまいたくなる。そんな時私は一日の仕事をおえて夕方少しの時間だけと大学を訪れ、学生時代からの師に困っている問題を話すのである。保育とは学問的に分野の違う先生だけ

れど、何の研究も同じであつて研究の進め方、まとめ方など教えていただいている。何度も行きづまり今度こそだめだと思ひ暗い気持ちで先生の所へ行き、教わつたり議論したりしていると、投げだそうと思つた観察結果からすばらしい法則のようなものが浮かび上がってくることもある。私の拙い話の中からも何か新らしいものをひき出して下さり、研究に対する新らしい力を与えて下さるのである。私たちはひとりよがりの考えで保育をおこなつてはならない。自分自身の考えに対する批判を他の人に求め、それが客観的に科学的にみて間違ひでないか、常に気をつけねばならぬ。こうして師によつて助けられ導かれて私は一步一步進めることを心から感謝し、それと共にむくむくと湧いてくる新らしい研究への意欲に走り出したいような喜びを感じながら、もう暗くなつた道を帰宅するのである。

研究活動の保育上における効果

幼児とは何ぞや、を理解することは、保育に関する最も重要な問題と考えられる。私が従来から幼児観察をおこなつてきた現在、最も大きな収穫として次の二つのものをあげることができよう。すなわち、その一つは、わずかながらも幼児の本質を客観的

に把握することができたということであり、もう一つは、これら研究活動の連続によつて、さらに彼らの本質を深く知ることができる可能性をみいだしたことである。これらの収穫は私の保母としての自信を深めるために重要な役割を果たしてきた。

従来からの観察事実から、ただ漠然と考えていたことが科学的に説明できたことも多々あつた。また私がこれまで知ることのできなかつた幾つかの事実を知ることができた。これらの知識上の収穫もさることながら、研究活動が進むにつれて、私の幼児教育に関する不安な態度にかなりの変化が生じ、わずかながらも自信のある態度になつたことは、実に大きな収穫であつた。

保育所内において、幼児がブランコ遊びをしている様を観察すると、それはほとんどの場合男児のみによつて占有されている。

(註、この現象は幼児の数とブランコの数との相対的關係その他によつて左右されるものでこの場合には、幼児数に比してブランコの数が少なかつた。)そこで私は適当な時間がくると男児を他の遊びに替えさせ、女兒にブランコを譲るようにしむける。こうした私のなんでもなような態度も、実のところ従来の観察結果にもとづいてなされるものである。ブランコに対する好みの度合は、男児女兒共に高く、お互にそれで遊びたがる。またその遊びにおける飽時間(註、飽きるまでに要する時間)も男女差なくともに長い。そのため女兒

よりも優位にある男児が、一度ブランコを占有すると、よほどのことがない限り、それを女兒に譲ることはなく、女兒のブランコ遊びは全く望めなくなるのである。また女兒がジャングル遊びをしている時に、男児が邪魔に入り女兒を追い払うことがある。この場合、私はそれを放任しておく。このような私の態度にも調査結果にもとづく根拠がある。それはジャングル遊びにおける飽時間には女兒のそれに比して男児が著しく短いことに起因している。そのままにしておいても男児はジャングル遊びにすぐ飽きて他の遊具に移っていくものである。

このような具体例は数多いが、いずれにせよ、自分の調査結果によって得られたものが、実際保育にあつての私の指導性に大きな影響をあたえていることは事実である。

おわりに

私たち保育の仕事は、言うまでもなく、子どもたちが心身共に健やかに育成されるよう環境を整備し、彼らの成長発達を助け導くことである。しかも急激に進歩していく人間社会に常に適応していかなばならない。大切な子どもを託され、この重い責任を背負う保母は、子どもを理解し、仕事に対する信念と愛情をもって

保育にあたらねばならない。そのためには、保母自身が常に研究し努力し進歩するよう心がけねばならないと思う。現場に働く保母としての研究は立派な研究をするための研究ではなくて、よき保母となり、よき保育をおこなうための研究でなければならぬと思う。保育所においては、あくまでも子どもたちの生活が主体であり、保母の研究は付属的なものであるべきだと思う。したがって子どもは決して保母の研究の実験材料であってはならない。そのために子どもの生活が犠牲になるようなことは、絶対にあってはならないことと思う。また保母の研究は日々の複雑な仕事を怠りなく勤めた上での余分な仕事であり、保母の研究活動には極めて多くの制約が横たわっている。一保母としての小さな力でこういった多くの制約をのり越えて研究活動に手だしをすることは極めて困難である。そこには諸先生がたの御指導と周囲の人々の温い理解があつてはじめて目的に近づくことができるのである。

私の場合、よい師に導かれ、しかも、園長をはじめ同じ保育所に働く先輩諸姉の温い理解に包まれ、のびのびと研究できることを本当に幸せだと思ふ。

(昭和三十四年十月二十一日記)

(やわらぎ学園保育園)

※ ※